

## 社会的実践としての日常会話Ⅱ<sup>1</sup> —「親しさ」の実践—

高木智世

### 1. 娘が母に名乗るとき

唐突ではあるが、まずは、実際に生じたある電話の会話の開始部分に目を通していただきたい。なお以下に提示するデータ中に用いられている記号の一覧は、付記を参照されたい。

データ (1)

- 01 ((呼び出し音))
- 02 M: もしもし.
- 03 (1.5) ((この間にMが苗字を名乗っているようにも聞こえるが、小声である上に雑音が重なっているため、ほとんど聞き取れない。))
- 04 D: もしもし: : ?
- 05 M: は: い
- 06 D: まさよです.
- 07 M: は: : : い.

上掲のように開始される電話会話は、筆者の授業を受講した女性の一人が、授業の課題の一環として自分(D)と母親(M)との会話を収録したものである。この断片の後に生じるやりとりの内容から、この学生は大学に通学するために下宿しており、冬休みに遠方の実家に帰省するための飛行機のチケットを購入しようとしていること、しかし、すでに希望する期日は空席がほとんどないことを母親に伝えるために電話していることがわかる。それ以上のこの受講生に関わる個人的な情報を持っていたわけではない。しかし、この冒頭の部分を聞いたとき、歳の近い姉か妹がいるのではないかと彼女に尋ねると、驚いた顔をして「姉がいます。」と答えたのである。

なにも探偵張りの推理力が筆者にあるわけではない。電話の冒頭で、母親に対して娘が名乗る必要があるとすれば、家族に同年代の別の女性がいると考えるのが自然ではないか。しかし、それだけでは、やはり、推理の域を出ない。この結論は、2人のやりとりの細かい観察に裏付けられることを、少し詳しく見てみよう。

04行目でDは、02行目の「声のサンプル」のみから、受け手がMであることを認

識していることがわかる (Schegloff, 1979)。というのも、発話末の音を引き伸ばしながら上昇イントネーションで発する「もしもし」は、相手が認識できていないときには用いることができないであろう。次の 05 行目で M が「はい」としか答えていないのに対し、06 行目で D は「まさよです」と名乗っていることもこのことを裏付ける。つまり、相手は自分のことを「まさよ」と名乗ることができる関係にある者であることを、すでに認識しているわけである<sup>2</sup>。02 行目の「声のサンプル」のみで M が認識できたのであれば、D は、04 行目の時点でそのことを示しつつ自身を名乗ることも可能であったであろう（例えば、「あ、まさよです。」というように。）しかし、実際には、電話の開始におけるコミュニケーションチャンネルの確立を確認するための呼びかけ（と応答）の表現として特化されている「もしもし」を用いて再び呼びかけをしているのは<sup>3</sup>、03 行目で間合いがあり、コミュニケーションチャンネルが確立されていない可能性があったためであろう。05 行目では、M のほうが、掛け手が自分にとって身近な者であることがわかったことを示している。というのも、05 行目の「はい」もやはり相手を認識していることを示す音調が用いられている上に、D が 04 行目ですでに（自分が明示的に名乗っていない、もしくは、03 行目において少なくとも苗字は名乗っていてもそれがきちんと聞き届けられていないにもかかわらず）受け手である自分を認識していることを示しているのに対して、何ら疑問を呈していないからである。しかし、05 行目の発話は、掛け手を特定できていることを実演的に示してはいないことに注意しよう<sup>4</sup>。ゆえに、D は 06 行目で明示的に名乗るのである。つまり、この名乗りは、電話の受け手（母親）が、04 行目の発話を聞いただけで掛け手が身近な者であることを認識しながらも、誰であるかを特定できない可能性があること、そしてそれが母親の 05 行目の発話において具現化されている事実への志向として為されているのである。D に年の近い同性の家族がいるならば、そのような可能性に志向するのは極めて合理的であり、理解可能なのである。

この短い断片の分析から示したかったのは次のようなことである。西阪（2006）が述べているように、電話の中の会話は、我々が電話の外で取り結んでいる様々な関係性の中に埋め込まれていて、その関係性は、電話の中のやりとりを組織する合理性の根拠として常に参照されている。その限りにおいて、電話の外の関係性は、電話の中のやりとりを詳細に観察することを通して浮き彫りにされるはずである。D が M の二人の娘のうちの一人であることが、電話の開始の数秒間のやりとりにおいて透けて見えるのである。いや、むしろ、当事者たちが、そのような関係性を合理性の根拠としてかくのごとく電話を開始したと言うべきであろう。

ただ、電話の会話において電話の外の関係性が参照されると言うだけでは、十分でない。人と人の関係性は、当事者間の日々の相互行為の積み重ねを通して、確認され、更新され続けるものに他ならない。電話の会話自体がそのような実践の一つであり、対面

の相互行為や（電子メールなど）他の手段を用いた相互行為の一つ一つがそうであるように、その後の関係性を決定づける。その意味において、人と人の出会いは、常に不可逆的である。その不可逆性は、親密な関係性が築かれていると当事者間で認識されている場合や、家族など、親密な関係であることが一般的な期待として想定される場合も同様である。むしろ、すでに「親密な関係」であるからこそ、今ここの相互行為の実践においてその親密さを裏切ることのないように特段の注意が払われるように思われる。

この点をデータ（1）に戻って考えてみよう。06行目でDが「まさよです」と丁寧形を用いているのが目立つ。Dはこの電話会話において、この発話にのみ丁寧形を用いている。この丁寧形の使用は、MとDが親子であるという関係性によって（規範的に）期待されるはずの親密さと矛盾するととらえるのは早計である。「まさよです」という言い方は、電話の冒頭で「デフォルト」的に為される儀礼的な名乗りであることを際立たせる。つまり、Dは単にここで儀礼的・形式的な名乗りをしているにすぎないことを主張しているように思われる。なぜか。直前の05行目でMはDを特定できたことを実演的に示していないことを思い出そう。姉がいるとはいえ、母親であるMが「声のサンプル」だけで自分の娘Dの声を特定できなかったとすれば、それこそ母娘の関係にまつわる規範的期待に反する。名乗りを儀礼的・形式的なものとしてデザインすることにより、Dは、Mが自分を声だけで特定できなかったと考えたから名乗るわけではなく、儀礼的・形式的に名乗っているだけであることを主張しつつ、実際にMがDを特定できていないという可能性に対応できるのである。さらに、この名乗りに対するMの07行目の反応が興味深い。この発話は、05行目の反応とほとんど同様に産出されており、敢えて05行目の発話を繰り返しているように聞こえる。同じ反応を繰り返すことによって、Mは、06行目のDの発話によって自分の認識に何ら変更は加えられなかった、つまり、すでに05行目において、自分は（Mが名乗る前に）掛け手が「まさよ」であることを認識していたことを主張しよう。05行目において、「もしもし」に対して「はい」と答えること、その「はい」を独特のイントネーションで産出することによって、そのような（再）解釈が可能となっているという意味で、05行目の発言は、精巧に組み立てられているのである。このように、MもDも、MがDの声のサンプルのみでDであることを特定できないということが公然化する事態を巧みに回避しつつ、掛け手と受け手の相互の特定を達成しているのである。それは、「声だけでわかる親しい関係」であるという、この電話の外の関係についての認識を参照しているだけではなく、その認識を損なう可能性を覆い隠す相互行為の実践を通して「親密な関係」が更新されているのである。

以上のように、「親密な関係」は、相互行為の中で実践されていることそのもの、そして、その積み重ねであり、相互行為に外在的な事実ではない。今見たように、それは当事者同士で明示的に語られることなく、相互行為の組織のされ方の隅々に組み

込まれ、実践されるのである。この小論では、このことを、ある「親密な」間柄にある二人の会話において為された依頼とその反応の展開を詳しく分析していくことを通して示したい。まずは、その会話の断片を見てみよう。

## 2. 「スムーズでない」依頼

以下において分析の対象となるデータ(2)は、姉(H)と妹(Y)の電話の会話である。YはHにもらったラベル作成用のソフトウェアが正常にインストールでき、使用できることを伝える。二人は、そのソフトを用いる場合に適切な印刷用紙の種類について確認した直後、01行目に続く。

データ(2)

- 01 Y: で、もう一つおね [がいごとが(h) あ(h) る(h) ん [だ(h) け(h) ど(h)  
 02 H: [うん. [はh いはh い.  
 03 Y: い: (hh) い(hh)? .hhh あの(h) .hhh <プリンターの> インク  
 04 (0.5)  
 05 H: う [ん,  
 06 Y: [を <あそこで> 買ってくれる?  
 07 (0.7)  
 08 Y: 今日<ヤシマ>にいったんだけど:  
 09 (0.5)  
 10 H: あ! (.) ないわけ: : : ?  
 11 (0.5)  
 12 Y: 金額がちょっと高いかな [: と(h) 思って(h) hehhhhhh.  
 13 H: [あ! ああ: (hh) そっか(h) そっか(h).=  
 14 H: =. hh じゃよ- よg- [ん? それはな- [なんてい [う  
 15 Y: [. hhh. hhhhhh [. hhhh [あの ね:  
 16 H: [番号: だっけ?

このデータを収録し、提供下さったのは、Yの娘である。彼女によると、Yには他にもきょうだいがいるが、とりわけHと「仲が良く、頻繁に連絡を取り合っている」とのことである。そのような関係性が、この短い断片の中にどのように埋め込まれ、実践されているのであろうか。

音声データを聞かないとなかなか会話の雰囲気をつかみにくいかもしれないが、少

なくとも、Y からH に対して依頼が切り出されていることはわかるであろう。その展開がスムーズとはいえないものであることも、直感的に読み取っていただけたらどうか。会話の展開がスムーズではないと直感的に感じられるとき、そこでは、当然、会話者自身が会話を進行させる上での何らかのトラブルに遭遇しているわけであるが、そのトラブルは、必ずしも、会話者個人の属性やコミュニケーション能力、偶然的に生じた言い間違いや誤解等に起因するわけではない。相互行為を組織する上での合理的な理由がそこに隠されている場合も少なくない。

この小論では、上掲の会話断片において依頼が相互行為的に達成される過程を仔細に見ることを通して、会話者間の「親密な関係」の相互行為的实践がある種の問題を生みながらもその問題がやはり相互行為的に解決されていること、そして、その結果として一見「スムーズでない」やりとりが生じていることを明らかにする。「親密な関係」は相互行為の今ここで繰り広げられる実践そのものであるからこそ、相互行為の現場の様々な偶発性に左右されながら、会話者の共同作業によって達成されていることなのだ。本稿では、会話分析という手法を用いて、このことを明らかにしたいと思う。ここでいう会話分析は、「会話の分析」という意味ではなく、相互行為を厳密に分析する方法としてHarvey Sacks, Emanuel Schegloff, Gail Jefferson らによって創始・開発された一つの研究手法・領域を指す。この方法は、会話を行為の連なりとしてとらえ、一つ一つの行為がどのように組織されているかを厳密に見ていく。その組織のされ方には、「会話」として認識される社会的相互行為活動の一形態を成立させている、参加者の合理性への志向が埋め込まれている。会話分析は、そうした参加者の志向を可視化する作業でもある<sup>5</sup>。

焦点となる依頼の行為については、Brown & Levinson (1978) に代表されるポライトネス理論と関連付けて、選択される依頼表現と、話者の属性、あるいは、依頼の受け手との「親疎関係」との相関性を明らかにすることを目的とした研究が多い。しかし、「親疎関係」が依頼表現の選択を左右する変数の一つであることを無批判に前提とする前に、話者がその特定の受け手との関係性を参照し、再確認する仕方がどのように相互行為の組織に埋め込まれているのかをまずはきちんと厳密に捉える行き方であってよいのではなかろうか。

### 3. 分析

#### 3.1. 行為投射的発言の未完結性

まずは、Y の依頼の切り出し方に注目してみよう。データ (2) は、「おねがいごと」をすることを明らかにするY の発言から始まっている。この発言自体は、「おね

がいごと」(すなわち「依頼」)ではなく、あくまでも「おねがいごと」をするという予告である。Schegloff (1980) は、このような、行為を予告する発言を行為投射的発言 (action projection) と呼んでいる。そして、日本語における行為投射的発言は、「～だけど」といったような形式で区切られ、文として未完結であることが多い<sup>6</sup>。別の会話からの例を一つだけ挙げておこう。

データ (3)

- 01 S : で : : ちょっと聞きたいんやけど : : ,  
 02 M : うん.  
 03 (0.8)  
 04 S : あの : : : (0.8) 石川県の : 教採の :  
 05 M : うん.  
 06 S : なんか過去問みたいなのって : : , 過去問とかー 過去問じゃな  
 07 くてもなんか<対策>みたいのあるやん.  
 08 (. )  
 09 M : うん.  
 10 S : あれって : : :  
 11 (1.2)  
 12 S : どっかに売っとるかな : .

S の 01 行目の発言が、行為投射的発言であることはわかりやすいであろう。S は「聞きたいんやけど : : 」の「けど」を強調して発しつつやや音を引き伸ばし、明らかにこの時点で発話を区切っている。そして、M もその直後に「うん」という受け手としての反応をすることで、S の発話が区切りに至ったという理解を示すと同時に、ここで自分が発言順番を取って話し始めることを差し控えることを表示する。つまり、01 行目が行為投射的発言として完結していること、そして、それが行為投射的発言であるからには、この後に S がさらに発言を続けることが予期されるという理解を示しているのである。

このように、ある特定の行為を行うことを予告する発言が「～けど」という形式で区切られたとき、受け手はしばしば、たとえ文法的には未完結であっても、その場所を、予告された行為へ進むことへの了解（もしくは拒否）を示すことのできる機会としてとらえる。それは、受け手として協調的かつ合理的なふるまいなのである。さらにいえば、「～けど」というような、(文末ではなくても) 一つの区切りとして聞かれる位置に達するのを待つことすらせずに、それが特定の行為を行うことを予告する発言であることが観察可能となった時点で、了解を示す反応をすることもある。そうし

たふるまいも、現話者の発話をさえぎるものではなく、現話者が予告した行為へ進むことを積極的に促している反応と受け止められよう。

さて、データ (2) に戻ってみると、02 行目の H の「はh いはh い。」は、まさにそのような位置で生じていることがわかる。

データ (2')

- 01 Y: で、もう一つおね [がいごとが (h) あ (h) る (h) ん [だ (h) け (h) ど (h)  
 02 H: [うん. [はh いはh い.  
 03 Y: い: (hh) い (hh) ? . hhh あ (h) . hhh <プリンターの>インク  
 04 (0.5)  
 05 H: う [ん,  
 06 Y: [を<あそこで>買ってくれる?

Y が最初の区切りとなりうる箇所 (01 行目の「だ (h) け (h) ど (h)」)、あるいは、文法的に完結するとみることができる箇所 (03 行目の「い: (hh) い (hh) ?」) に達する前に、H は「はh いはh い。」と応え、Y の「おねがいごと」を聞く用意があることを示しているのである。とりわけ、予告された行為が依頼である場合、可能な限り早い時点で了解を示すことは、その依頼を「快諾」する用意があるものとして聞かれるであろう。

しかし、そうであるならば、Y は、なぜ 03 行目で「い: (hh) い (hh) ?」と続け、敢えて行為投射的発言を文法的に完結させたのであろうか。つまり、Y は、H がすでに了解を示している時点、つまり、01 行目の終わりで行為投射的発言を終え、次の発言に進む選択肢もあったのに、敢えて「い: (hh) い (hh) ?」と続けて文法的に完結させているのである。このことにどのような相互行為上の理由があったのだろうか。次節でこの問題を検討しよう。

### 3.2. 繰り返された「おねがいごと」

Y が 01 行目の途中から「い: (hh) い (hh) ?」までを笑いながら発言していることは、この問題と無関係でないように思われる。Y のこの笑いは、まずは、端的に、予告されている依頼の重大さを軽減してしよう。つまり、「おねがいごと」は、それほど深刻な依頼ではないことを予め示しているのである。それと同時に、「もう一つ」と言うことによって、Y がこの電話の会話においてすでに別の依頼を H に対してしている事実を自覚していることを示し、そのように「おねがいごと」ばかりしている自分を自ら笑うふるまいとしても聞かれよう。そのようなふるまいは嘲笑すべきもの、恥ずべきものだという認識を少なくとも持っている、ということを主張しているわ

けである。Hがいち早く02行目でそれを受け入れる反応を示すのも、この笑いの自嘲的な側面に感応しているともいえよう。そして、このHの「はh いはh い。」がYの発話の途中でオーバーラップして発せられているにも関わらずYは発話を続け、オーバーラップを「生き延びる」のである。それは、Hが反応を開始した時点では自分はまだ発言の途中であり、発言を完結させる権利が自分にあるという主張として聞かれよう。そして、重要なのは、「い:(hh) い(hh)?」という部分を続けることによって、この発言を、単なる行為の予告ではなく、その行為を為すことについて明示的に相手に許可を求めるものとして完結させることができるということである。つまり、実際には、Hの了解は、Yの行為投射的発言が完結する前に、Yの発話に重ねて発せられているのであるが、連鎖上は、あくまでも、「い:(hh) い(hh)?」という形で完結された許可を求める発言の後に、承諾として発せられたものとして聞くべきであること、Hの性急な了解は「フライング」であったことが主張されているように思われる。そうすることによって、このあとにくる「おねがいごと」を、Hの承諾を得てから為されたものとして位置づけることができるのである。Yがこのように周到に自分の「おねがいごと」の布石を行うのも、それが、この会話においてすでに別の依頼をした上での「おねがいごと」だからであろう。このように、Yは、この「おねがいごと」が、繰り返されたものであるために、より「やりにくさ」が付随するものであるという認識を、自分の行為投射的発言の組み立てに埋め込んでいるのである。依頼の「やりにくさ」は、たとえば、Brown & Levinson (1978)においては、「フェイス侵害度」というような概念に置き換えられよう。しかし、それは、Brown & Levinson (1978)を枠組みとした研究の中で前提とされているように依頼者・被依頼者の関係や依頼の重さなどの変数(のみ)によってアルゴリズム的に導き出され、発言の形式を決定するのではない。会話の当事者が、その相手とのその特定の出会ひの中で、その時そのタイミングでその依頼を行うことをどのように捉えているかという、複雑かつ偶発的な様相についての理解が依頼の行為の組み立て方に埋め込まれているのである<sup>7</sup>。そして、依頼の行為の連鎖がどのように展開するかは、受け手の反応の仕方に決定的に依存している。依頼という行為は、相互行為的に達成される出来事なのである。

### 3.3. プレ・プレ

前節で捉えようとしたのは、Yが、Hとの「親密な関係」を参照したり実践したりすることとは独立に、相互行為の今ここでその行為を為すことの合理性について志向しているということである。そのような志向と二人の「親密な関係」への志向が複雑に縊り合せられながら、また、Hの反応に敏感に感応しながら、Yによる依頼の行為が展開していく。以下ではこのことを丁寧に見ていこう。

Yは、自分が「おねがいごと」をすることについて(自分の発言と重ねて)Hがす



でに了解を示していることを無視しているわけではない。3行目で「い:(hh)い(hh)?」と発話し終えた時点で、Hの承諾の反応を待つ必要性はもはやないという理解を示している。Yは笑いながら「い:(hh)い(hh)?」と発した後、そのまま大きく息を吸って(トランスクリプト上で「.hhh」で表示されている吸気音)「あの(h)」と続けている。この間、Hの反応を待つような間合いは一切なく、むしろ、息を継いでそのまま次の部分「あの」に走り込んで発しているかのように聞こえる。そして、注目すべきは、その後に急激に発話の速度を落として「<プリンターの>インク」と発し、この時点で極めて明確に発話を区切り、Hが反応する機会をつくっているということである。

Yがここで発話を区切っていることについて分析を進める前に、Schegloff (1980)で報告されている「プレ-プレ」という行為について解説しておく必要がある。

Schegloff (1980)は、行為投射的発言が、相互行為上、興味深い働きをする場合があることを指摘している。Schegloffは、この働きを担う発言をプレ-プレ(pre-pre; preliminary to preliminary, 「前置きの前置き」)と呼んでいるが、それは、次のような理由による。行為投射的発言の次にくるのは、実は、多くの場合、予告された行為そのものではなく、その行為の達成に向けて為される準備的発言「プレ」である。行為投射的発言は、その後に行うことを予告するという意味においてそれ自体プレ、つまり、予備的な発言である。同時に、その直後に発言されることを、予告された行為へのプレとして聞くように受け手を導く。つまり、行為投射的発言は、次に続く部分を聞く者に対して、先に予告した行為がさらにその後続くこと、ゆえに、行為投射的発言の直後のその部分は、予告した行為の準備として聞くべきであることを知らせるのである。プレ-プレは、ある程度の長さの発言順番を用いてある行為を達成しようとする発話者が、まずはその行為を予告して布石をおくことによって、予告された行為が達成されるまでは、受け手が順番を取ることを差し控えるように牽制する手続きでもある。日本語においても、「お願いがあるんだけど」「ちょっと聞いてもいい?」といった表現が、同様に用いられることは、直感的にもわかりやすいであろう。データ(3)の01行目のSの発言も、典型的なプレ-プレである。

注意しておかなければならないのは、行為投射的発言が必ずプレ-プレとして用いられているわけではないということである。というのも、行為投射的発言の直後に予告されたその行為そのものがくることもあるからだ。その例としてSchegloff (1980)は、「微妙な」質問等の前置きとして用いられる"pre-delicate"を挙げている。行為投射的発言がどちらの働きを持つかは、会話者自身が相互行為を展開しながら確定していくのである。日本語でも、たとえば、「ちょっと聞いてもいい?」という質問は、プレ-プレとして用いられることもあれば、"pre-delicate"としても用いられうるように思われる<sup>8</sup>。

さて、データ (2) に返ろう。01 行目に始まる Y の行為投射的発言は、確かにプレ・プレとして用いられ、受け手にそのように受け止められているのか確認しておく必要がある。

件の行為投射的発言の後、Y の発言は、03 行目以降で「プリンターのインクをあそこで買ってくれる？」と続いている。つまり、依頼の予告の直後に、まさにその依頼をしているように見える。ならば、これは、依頼の前置きではあっても、前置きの前置き、すなわち、プレ・プレとみなすことはできない、と言えそうである。しかし、この見方は、Y がどのように発話し、H がどのように反応しているか、その詳細を観察することなく、何が言われたかのみ注目したものである。そのような見方は、実際の言葉のやりとりにおいて生じている様々な重要なことを取り逃がしてしまう。順次見ていこう。

先に言及したように、Y は、03 行目において急に発話の速度を落として「<プリンターの>インク」と言った直後、非常に明確に発話を区切っている。「インク」の末尾は強調されているがピッチはほぼ変わらず、そのまま唐突に発話が中止される。直後に続く間合いと併せて、明確な発話の区切りが生じていることが認識可能である。このように、明らかに発言順番の途中でありながら、発話が区切られるとき、その場所は、受け手が反応する機会としてつくられている (西阪, 2008a)。受け手はその機会において、そこまでの部分の理解に問題がないことを示す反応 (いわゆる「あいづち」) をするか、あるいは、何らかの問題がある場合には、発話者に対して問い返すなどの行為をすることができるのである。名詞句の直後に発話が区切られた場合は、その名詞句の指示表現が、受け手にとって問題がないかが焦点化されているといえよう。それは、しばしば、その指示表現の対象を受け手が問題なく認識できるかということが含意されている。つまり、Y が「<プリンターの>インク」と言って発話を区切ったとき、「<プリンターの>インク」によって指示される対象について、受け手が何らかの水準で認識を示すことが適切となる機会がつけられていると見ることができる。

Schegloff (1980) においても、プレ・プレの直後には、しばしば、予告した行為において言及することになる事物、人や場所等を受け手が認識・理解できるかどうかを確認したり、認識・理解できるように説明したりする作業が行われることが指摘されている。つまり、まずは受け手による指示対象の認識・理解の問題を焦点化して解決を図った上で、予告した行為そのものを達成するための手続きとして話し手が用いているのがプレ・プレである。

以上を踏まえると、Y は、「<プリンターの>インク」でひとまず発話を区切ることにより、予告した依頼の準備として、受け手による指示対象の認識・理解の問題を焦点化しているとみなすことができよう。そして、05 行目で H が「うん」という反

応を開始した直後、「<プリンターの>インク」 という名詞句の文法的位置づけを明確にする格助詞「を」を強調的に発し、「<あそこで> 買ってくれる？」と続けて、依頼の発言を完結するのである。つまり、文法的に独立した複数の発話単位を用いることなく、一つの発話単位（ここでは、「文」）を構築する過程に、受け手による指示対象の認識・理解の表示を求める作業と依頼そのものを組み込んでいるのである<sup>9</sup>。これは、日本語の語順や膠着語としての性質を資源として可能となる相互行為の組織の仕方である。

このように、相互行為上の働きとしては、01 行目で開始された行為投射的発言はプレ・プレとして用いられているとみなすことができよう。一人の発話者の発言が文法的に一つの完結した単位からなる場合でも、その内側に、受け手が反応する機会を含んだ相互行為を組み込むことを容易にする言語的資源を日本語が備えているということは、日本語会話の組織の様々な現象と関わる重要な事実であり、興味深い研究テーマである。ここでは、日本語のそのような特質ゆえに、プレ・プレの後のプレと、予告した行為そのものを、一続きの発話単位として構築することが可能であること、それゆえに、Schegloff (1980) において提示された、英語におけるプレ・プレとプレによって開始される行為連鎖の組織とは様相が異なることのみ確認しておきたい。

### 3.4. 指示対象を「認識・理解」すること

さて、Yの発言が「<プリンターの>インク」の直後で区切られたときに、Hがその指示表現の対象を認識・理解できるかが焦点化されていると述べた。ここで注意が必要である。受け手による指示対象の「認識」とは、例えば、単純に、その指示対象を特定できるかどうかということではない。受け手は、なぜ今ここでその指示対象が言及されているのか、進行中の相互行為との関連性を適切に理解することが期待される。そして、受け手は、プレ・プレによって予告された行為に関連付けて、今ここで差し出されている指示対象の認識・理解の仕方を探索するのである。Yによって「プリンターのインク」が認識の対象として焦点化されたときに、Hは、それを、予告された「おねがいごと」と関連付けて聞くはずである。

ここで、「<プリンターの>インク」の末尾は強調されているがピッチはほぼ変わっていないという事実注目しよう。串田(2008)は、ある指示表現の対象を相手が認識できるかどうかを予備的に調べる方法の1つのタイプとして、発話の産出の途中で、文法的軌跡を変更することなく、指示表現の末尾を上昇イントネーション等の有標な発音で際立たせて発話を区切る事例を分析し、このような手続きを認識用指示試行と呼んでいる。そして、このような手続きが用いられるとき、その指示表現について「何らかの不確かさに指向していることを示すが、不確かさの種類（相手が対象を認識できるかどうかの不確かなのか、その指示表現の正しさが不確かなのか、など）

を明示するものではない」としている（串田 2008：98）。串田の定義に従えば、ここで見ているYの「<プリンターの>インク」も、（上昇イントネーションではないが）有標的な発音を用いて区切られているという点では、認識用指示試行と呼ぶことができるかもしれない。しかし、Yの発話の仕方は、その表現の正しさについても、相手がそれを認識できるかどうかということについても、不確かさを示しているようには聞こえない。それでも、受け手による認識・理解の表示の機会として発話が区切られているのは確かである。つまり、Yは、「<プリンターの>インク」というその発音の仕方によって、相手が認識・理解できるかを確認するというよりも、むしろ、相手が当然認識できるはずであるということを主張し、受け手による認識・理解の表示を誘っているのである。すなわち、受け手は、「プリンターのインク」という表現から、今ここでその対象が言及されている合理性を適切に導き出し、今この文脈に適切に関連付けできるはずであるという主張がなされているのである。「プリンターのインク」という言い方が極めて一般的で言語形式上は何ら特定化の手がかりを含まないことが、逆に、そうした言い方で十分にYの意味するところを理解できるだけの知識を共有している関係性を前提としていることを示していよう。また、データ（2）の01行目に始まる依頼の連鎖の直前に、YがHから借りたソフトを用いてラベルを印刷できたという話をしていたことも、参照されていよう。このように、Yが03行目の末尾で区切る発話の仕方は、この相互行為内外でのHとの関係性が参照されているのである。

### 3.5. 0.5 秒の沈黙

さて、Yの発話の区切りの後の間合いは、0.5秒に及んでいる。以下にデータ（2'）を再掲する。

データ（2'）

- 01 Y: で、もう一つおね [が]いごとが (h) あ (h) る (h) ん [だ (h) け (h) ど (h)  
 02 H: [うん. [はh いはh い.  
 03 Y: い: (hh) い (hh) ? . hhh あの (h) . hhh <プリンターの>インク  
 04 (0.5)  
 05 H: う [ん,  
 06 Y: [を<あそこで>買ってくれる?

わずか、0.5秒の遅れであるが、Yが「<プリンターの>インク」と発話し終えた瞬間に発話の区切りに達したこと、および、それが、「プリンターのインク」について適切に文脈付けられた認識が可能であることを主張する機会としてつくられているこ

とを、Hが即座に判断し、問題なく認識できたことを主張するには遅すぎるタイミングである。音声データを聴いても、Hの反応は、確かに、遅れているように聞こえる。それは、Yが「<プリンターの>インク」 という指示表現に何ら不確かさがないことを主張するような区切り方をしているのと対照的であり、Yによってすぐに分かるはずだと主張されている事が何であれ、Hの側ではすぐには分からなかったことが可視化されている。そしてYは、Hの反応の開始にわずかに遅れて発話を再開する。このとき、Hの反応とオーバーラップする「を」は強調されており、Hの「うん」と競合するように、あるいは、Hの「うん」がYの発言順番の最中に発せられていることを強調しているように聞こえる。つまり、Yは、そもそも「<プリンターの>インク」の後の発話の区切りは、Hの反応の機会としてつくられたものではなく、偶然的に生じたものであり、Hがここで反応を示す必要はない（自分はHの反応を待っていたわけではない）ことを主張しているように思われる。そうすることによって、0.5秒の間合いが生み出した事態（すなわち、YがHによって即座に認識・理解されるべきと主張したことが、実際は、Hには即座に分からなかったこと、このことが公然となったこと）を解消し、「無かった事」とするかのようである。YとHの「親密な」関係性に対する規範的期待から逸れる事態が相互行為の展開を阻むトラブルとして顕在化する前に先手を打ったとも言えよう。会話者間の関係性は、どのような表現を用いるか、というような次元で参照されているのみならず、きわめて微細なレベルの相互行為の組織に埋め込まれ、実践されているのである。そして、実践であるからには、その達成が不順であることも生じうる。06行目のYの発言は、そのような事態に敏感に組み立てられ、「親密な」関係性の揺らぎが公然化することを阻止するようにデザインされているのである。

### 3.6. 依頼の妥当性

このように、Yは、「<プリンターの>インク」の後のHの反応の遅れをやり過ごし（つまり、それが何らかのトラブルを示すものとして扱わずに）、産出中の発話を文法的に継続させて依頼の発言を完結させる。その直後、再び、Hの反応の遅れとして聞くことのできる0.7秒の間合いが生じる。この部分を含めて、データ（2）を以下に再掲する。

#### データ（2）

- 01 Y: で、もう一つおね [がいごとが (h) あ (h) る (h) ん [だ (h) け (h) ど (h)  
 02 H: [うん. [はh いはh い.  
 03 Y: い: (hh) い (hh) ? . hhh あの (h) . hhh <プリンターの>インク  
 04 (0.5)

- 05 H: う [ん,  
 06 Y: [を<あそこで>買ってくれる?  
 07 (0.7)  
 08 Y: 今日<ヤシマ>にいったんだけど:  
 09 (0.5)  
 10 H: あ! (.) ないわけ: : : ?  
 11 (0.5)  
 12 Y: 金額がちょっと高いかな [: と (h) 思って (h) hehhhhhh.  
 13 H: [あ! ああ: (hh) そっか (h) そっか (h).=  
 14 H: =.hh じゃよ- よg- [ん? それはな- [なんてい [う  
 15 Y: [. hhh . hhhhhh [. hhhh [あの [ね:  
 16 H: [番号: だっけ?

07 行目の間合いは、HがYの依頼を即座には受諾していない、つまり、依頼の受諾が何らかの理由で阻まれているものとして聞かれる。いま見たように、プレ-プレの後のプレが、「プリンターのインク」を起点として十分に展開されないままに依頼そのものを具現化する部分（「買ってくれる？」）が産出されたことがその理由として考えられよう。少なくとも、Y自身は、07行目の間合いをそのようにとらえていることが、その後のYの発言から明らかである。Yは、Hが即座に受諾しなかったのは、直前の自分の発言自体が聞き取れなかったり、たとえば、「あそこ」という代名詞の指示対象がわからなかったりしたためではなく、今ここでこの依頼をすることの合理性や妥当性が十分に理解されていないものとしてとらえ、自分がこの依頼をするに至った経緯を説明し始める。この説明の途中、Yが08行目で「今日<ヤシマ>にいったんだけど:」と、インクを購入するつもりで別の店に行ったところ、何らかの問題が生じたことを予示する部分を発した時点で発話を区切る。この位置は、Hが受け手としての反応（あいづちなど）を示すことができる場所であるが、Hは、0.5秒の間合いのあとに発言順番を開始し、どのような「問題」が生じたのかということについての自分の理解を、先取りして候補として提示するのである。つまり、店に目当てのインクが置いてなかったため、今ここでHに対して「あそこ」で買ってくるように依頼しているという理解である。Yの発言を引き取って、先取りして理解の候補を提示することにより、その「問題」、ひいては今ここでこの依頼をしている理由を、Y自身が述べる前に推測できること、すなわち、Yの依頼はそれだけ合理的な理由によって動機付けられているはずであるという了見を示すことができるのである。しかしながら、Hが推測した理由に対し、Yは、実際には「金額が高かったために買わなかった」ことを明らかにする。Hが推測した理由が先に提示された結果として、実際には

依頼の合理性・妥当性を低めるような事情によるものであることが際立ってしまったのである。Hはそれを埋め合わせるかのように、「最初は思いつかなかった（ゆえに推測を誤ってしまった）が、Yの12行目の発言を聞いてその理由がいま理解できた」こと（「あ! ああ：(hh)」）、それが「十分正当な理由として認識できる」こと（「そっか (h) そっか (h).」）を、可能な限り早い時点で強制的に示し、依頼の受諾を前提としたやりとりを開始するのである（14・16行目）。Hは、ここで明示的に依頼を受諾することも可能であっただろうが、自分がYのために買ってくるべき商品の番号を尋ねる連鎖を開始することにより、依頼そのものはすでに受諾していたものとしてふるまうことができる。逆に、依頼の理由が明らかにされた後に改めて受諾をすれば、07行目の自らの反応の遅れは、依頼の理由がわからないがゆえに受諾を躊躇した（つまりその理由によっては依頼を拒否する可能性があった）ためという解釈を適応的に裏付けてしまう。依頼を実行するために必要なやりとりへできるだけ速やかに進むことが、依頼を引き受けることは改めて述べるまでもないという主張ともなるのである。このように、Hもまた、二人の「親密な関係」を参照する仕方でも相互行為が展開しているもののそれが順調に進行していないことに敏感に反応し、それを埋め合わせるかのようにふるまっているのである。

確かに、Yが依頼の準備（プレ）を十分に展開していれば、自分の依頼に対して、Hによるスムーズな受諾を引き出すことができたのかもしれない。しかし、それが「より望ましい」結果となっていたかどうかを論じるのはあまり意味がない。依頼の準備として説明すべきだったこと、すなわち、今ここでその依頼をする合理性や妥当性は、必ずしも説得力のあるものではなかった。少なくともHが候補として示したもののより説得性が低いことが公然化された。そういう認識を、例えば12行目の発話中の笑いによって、Y自身も示している。ならば、プレ・プレに対して依頼の快諾を示唆する反応をすでに示している相手に向けて、依頼の準備（プレ）を最小限にとどめて、まずは依頼そのものを完結させ、「相手次第」でその説明の提示に踏み切るのも一つのやり方であろう。相手が依頼そのものを実際に快諾すれば、わざわざ説得性の低い依頼の理由を持ち出す必要はない。また、実際ここで生じているように、結果的にその説明をせざるをえなくなったとしても、少なくとも、別の店でより高い値段で販売されているインクを購入したくないためにHの行きつけの店で買うように頼むことを当然の依頼と考えるような者ではないことを（その説明を先延ばしにしたというその事実によって）示せるではないか。YはHに対してすでに別の「おねがいごと」をしているのだから、なおさらそうした「気遣い」が志向されるであろう。

#### 4. おわりに

本稿では、社会言語学的研究において言語形式の選択に関わる一つの変数として捉えられがちな話者同士の関係性を、所与のものではなく、相互行為の実践を通して生み出され、再編され、更新されるものとして捉える視点を提示した。「親密な関係」は、「言語形式の選択」という次元をはるかに超えた緻密なレベルにわたって相互行為の組織に組み込まれ、社会的実践として実現しているのである。

このような視点は、実は、社会言語学やその隣接領域の研究者にとって常に関心の中心にありながら決定的な解決が見出されていない重大な課題、つまり、社会と言語の関係を経験的 (empirical) に捉える方法の開発に関して、一つの可能性を示唆している。

3節の分析において示されたことは、言語的資源が、発話の連なりとして具現化する相互行為を組織するために用いられる限りにおいて、相互行為における一言一言、いや、一音一音の発声がすでに「社会」の構築に関わっており、その話者が生きている生活世界の複雑さや重層性がそこに編みこまれているということである。たとえば言語学的には日本語の「語順」や「膠着語」的性質ととらえられる言語的資源の特徴が、微細なレベルにおける会話者間の関係性を参照し、実践する資源として用いられていることを論じた。つまり、言語構造と社会構造の関連を経験的に厳密に捉える一つの方向性として、相互行為の現場を、本稿で示したような仕方でも詳細に分析していくことが有望であることが示唆されていよう。言葉を用いて「共に何かを為す」相互行為の基本形態は、日常会話である。日常会話こそが、言語がもっとも自然な形で生息する場であり、かつ、社会が実体化する根源的な場、そして、その二者が一体となって息づく現場である (Schegloff, 2006)。

3節の分析を通して示したもう一つのことは、より根本的な事実である。すなわち、どのような言語を用いるにせよ、私たちの日常会話は、十全なコミュニケーション能力のある者としてふるまうことを指向する限り、行為の合理性の提示とその理解の提示を可能にする秩序に、隅々まで満ちている。行為の一つ一つ、発話の一音一音、そして声を発しないことをすることさえも、その秩序から免れることはない。今ここで、この相手との様々な次元における関係性を理にかなった適切な仕方でも参照し、実践することも、その秩序を織りなす糸の一つである。

#### 参考文献

- Brown, P. and S. C. Levinson. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 林誠. (2005). 「『文』内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって



- て―』『活動としての文と発話』ひつじ書房.
- 串田秀也. (2008). 「指示者が開始する認識探索―認識と進行性のやりくり―」『社会言語科学』10 (2), 96-108.
- 森純子. (2008). 「会話分析を通しての『分裂文』再考察―『私事語り』導入の『～のは』節―」『社会言語科学』10 (2), 29-41.
- 西阪仰. (2006). 「関係の中の電話／電話の中の関係」山崎敬一編『モバイルコミュニケーション―携帯電話の会話分析―』大修館書店.
- 西阪仰. (2008a). 「発言順番内において分散する文―相互行為の焦点としての反応機会場―」『社会言語科学』10 (2), 83-95.
- 西阪仰. (2008b). 「Pre-pre (プレ・プレ)」『言語』37 (5), 72-77.
- Schegloff, E. A. (1972). Sequencing in conversational openings. In J. Gumperz and D. Hymes, (Eds). *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*. (pp. 346-380). New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Schegloff, E. A. (1980). Preliminaries to preliminaries: "Can I ask you a question?". *Sociological Inquiry*, 50 (3/4), 104-152.
- Schegloff, E. A. (2006). Interaction : The infrastructure for social institutions, the natural ecological niche for language, and the arena in which culture is enacted. In Enfield, N. J. and S. C. Levinson (Eds). *Roots of Human Sociality*. (pp.70-96). London: Berg.

### 付記：トランスクリプト記号一覧

- [            オーバーラップの開始位置。
- (m.n)      その秒数の間合いがその位置にあることを示す。
- (.)          0.2 秒以下の短い間合い。
- 発話：：    直前の音が延ばされていることを示す。
- h            呼気音。笑い声や、勢い良く発話されているために破裂音が聞こえることを示す。相対的な長さを h の数で示す。
- .h           吸気音。息継ぎや笑いなどを示す。
- 発 (h) 話    笑いながら発話されていることを示す。
- 発話        下線部分に強勢がおかれていることを示す。
- .            直前の部分が下降調抑揚であることを示す。
- ,            直前の部分が継続を示す抑揚であることを示す。
- ?            直前の部分が上昇調抑揚であることを示す。
- !            直前の部分が弾むような音調であることを示す。
- 発話 \_      直前の部分の音調があえて平坦に保たれていることを示す。
- <発話>      不等号で囲まれた部分が顕著にゆっくり発話されている事を示す。

## 註

<sup>1</sup> 『論叢 現代文化・公共政策 創刊号』において「社会的実践としての日常会話—電話会話の終了に関わるプラクティスを例に一」という題目の拙論を掲載させて頂いた。筆者は、カウンセリング場面や養育・保育場面など、大人同士のごく日常的な会話とは異なる様相を含む場面における相互行為を対象として研究を続けているが、これらの研究は、常に、日常会話という社会的活動における相互行為の組織の探究と両輪をなす。(その理由は、本稿の最後で簡単に言及している。) 本稿は、その両輪の片方、日常会話を社会的実践として捉えて観察を続ける作業の中で見えてきたことの報告として、先の論考に続くものである。

<sup>2</sup> もちろん、自分の実家に電話をかけ、中年の女性が電話を受けたことがわかった時点で(風邪を引いているためいつもと声の調子が異なる、声のよく似た女性が同居している、などの事態でない限り) それが自分の母親であると即座に特定できるのは自然なことであろう。重要なのは、相手が特定できていることが、発話の仕方に現れている、ということである。

<sup>3</sup> Schegloff (1972) が指摘しているように、電話の呼び出し音自体が、電話の相互行為を開始する行為であり、それは、電話の向こうにいる者に向かって受話器を取って相互行為に関与することを「呼びかける」行為なのである。その意味において、04 行目の D の「もしもし: : ?」は、2 回目の呼びかけである。

<sup>4</sup> 例えば、「あ、まさよか」というような発言であれば、掛け手が「まさよ」であること特定できたことを、そのように発言すること自体が証拠づけることになる。つまり、掛け手を特定したことを「実演的に」示していると言えよう。

<sup>5</sup> ゆえに、以下の分析では、常にデータ (2) のトランスクリプトを参照し、どのように発話されているかということについて頻繁に言及する。

<sup>6</sup> 特に 3.3. で取り上げる「プレーブレ」について、森 (2008) や西阪 (2008b) が、文法的未完結性に言及している。

<sup>7</sup> そして、それが観察可能であり、かつ、記述可能であることを示すのが、本稿の試みである。

<sup>8</sup> ちなみに、Schegloff (1980) は、行為投射的発言がプレーブレとして用いられているか、pre-delicate として用いられているかを示す手がかりとして発言の位置や形式に何らかの違いがあるわけではなく、会話の参加者が相互行為的に解決しなければならない課題であるとしている。日本語についてこの点も同様のことが言えるのかは、広範なデータに基づいた経験的研究を通して検証されねばならない。

<sup>9</sup> 日本語会話におけるこのような現象については、すでに林 (2005) や串田 (2008) が報告している。